



決算説明会

平成22年3月期（第28期）

平成22年 6月 4日（金）

【4570】

株式会社 免疫生物研究所

代表取締役社長 清藤 勉



決算概要・経営方針

平成22年3月期（第28期）

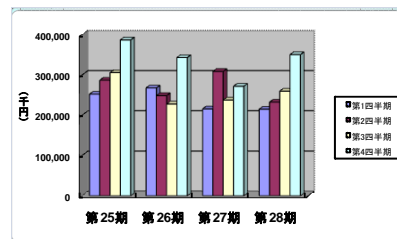
1. 決算内容について



単位:千円	H21年3月期 (第27期)	H22年3月期 (第28期)	前期比増減	主な要因
売上高	1,036,006	1,059,411	23,404 2.3%増	・牛海綿状脳症用検査キット伸長
営業利益	▲ 382,483	▲ 185,409	197,073 -	・人件費の削減 ・業務の効率化
経常利益	▲ 389,205	▲ 189,857	199,347 -	・貸倒引当金繰入額
当期純利益	▲ 496,818	▲ 230,133	266,685 -	・関係会社株式評価損 ・投資有価証券評価損



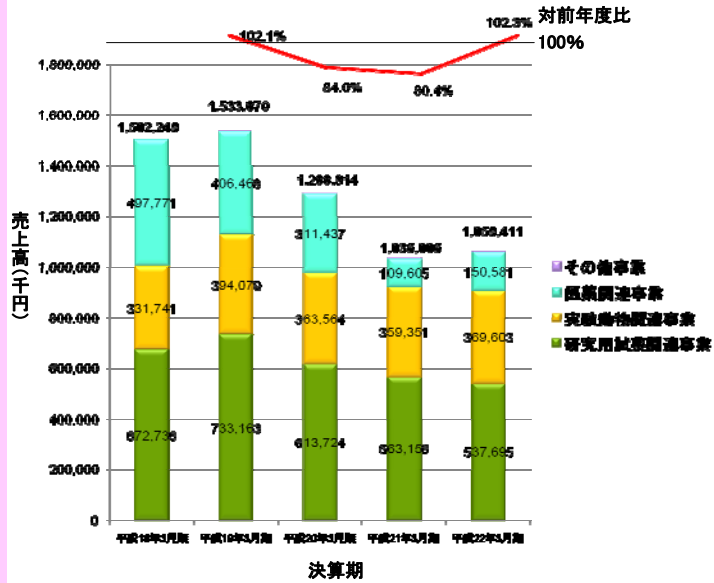
各期の四半期毎の
売上高推移



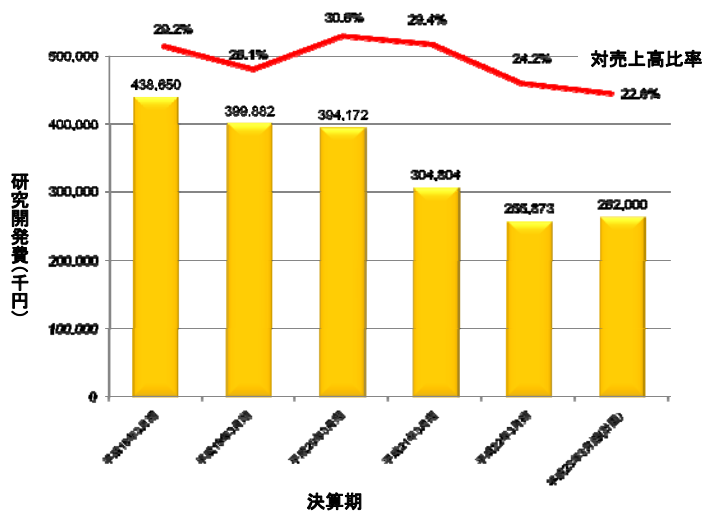
- 【研究用試薬関連事業】
売上高: は537,695千円 (対前年比4.5%減)
 - 業界の置かれている環境は継続して厳しい⇒ 減収へ
試薬関連受託サービスの売上げ回復の遅れ
 - 自社新製品26品目 (キット10, 抗体13, その他3)
- 【実験動物関連事業】
売上高: 369,603千円 (同2.9%増)
 - 製薬企業再編の影響あるも疾患モデル動物需要が回復
傾向 ⇒ ほぼ横ばい
 - 自社マウスが売上げに寄与
- 【医薬関連事業】
売上高: 150,581千円 (同37.4%増)
 - ニップルBSE検査キットの売上げが伸長
- 【その他事業】
売上高: 1,531千円 (同60.7%減)
 - オーストラリア支店閉鎖 ⇒ コスト削減



売上高推移



研究開発費





貸借対照表

(千円)

	平成21年 3月末	平成22年 3月末	増減額		平成21年 3月末	平成22年 3月末	増減額
(資産の部)				(負債の部)			
流動資産	799,191	706,712	▲ 92,478	流動負債	155,796	173,224	17,428
現金及び預金	137,299	95,511	▲ 41,787				
固定資産	1,812,565	1,670,013	▲ 142,551	固定負債	70,862	48,750	▲ 22,112
有形固定資産	1,281,543	1,204,359	▲ 77,184	負債合計	226,658	221,975	▲ 4,683
無形固定資産	125,337	134,079	8,741	(純資産の部)			
投資その他の資産	405,684	331,575	▲ 74,108	資本金	1,571,810	1,571,810	-
				資本剰余金	1,416,578	1,416,578	-
				利益剰余金	▲ 591,172	▲ 821,305	▲ 230,133
				自己株式	▲ 4	▲ 4	-
				評価・換算差額等	▲ 12,114	▲ 12,327	▲ 213
				純資産合計	2,385,097	2,154,750	▲ 230,347
資産合計	2,611,756	2,376,726	▲ 235,030	負債・純資産合計	2,611,756	2,376,726	▲ 235,030

Immuno-Biological Laboratories Co., Ltd.

7



キャッシュ・フロー

(千円)

	H21年3月期 (第27期)	H22年3月期 (第28期)	主な要因
営業活動による キャッシュ・フロー	35,160	▲ 173,795	・売掛債権の増加 ・減価償却費の減少 ・純損失の計上
投資活動による キャッシュ・フロー	▲ 215,245	▲ 16,940	・新システムの構築 ・固定資産の取得
財務活動による キャッシュ・フロー	▲ 21,026	▲ 21,114	・借入金の返済
現金及び現金同等 物の期末残高	295,108	83,417	

Immuno-Biological Laboratories Co., Ltd.

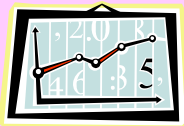
8



業績予想

(千円)

	H22年3月期 第28期(実績)	H23年3月期 第29期(予想)	前期比 増減	主な要因
売上高	1,059,411	1,150,000	90,589 + 8.6%	・営業力強化 ・新製品投入
営業利益	▲ 185,409	▲ 120,000	65,409 -	・人件費の抑制 ・減価償却費減少
経常利益	▲ 189,857	▲ 108,000	81,857 -	・内部統制構築コスト減
当期純利益	▲ 230,133	▲ 110,000	120,133 -	・減損による損失の軽減



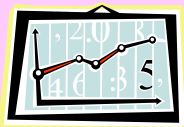
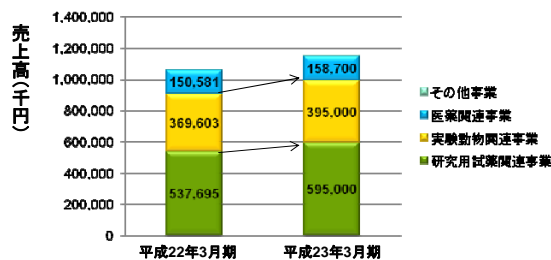
研究用試薬関連事業及び実験動物関連事業が、引き続き厳しい環境にあることに加え、通期業績予想を鑑み、期末配当は無配を計画しております。



第29期売上計画

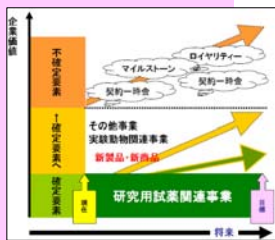
(千円)	第28期(実績)	第29期(計画)	対前年比
	平成22年3月期	平成23年3月期	
研究用試薬関連事業	537,695	595,000	10.7%
実験動物関連事業	369,603	395,000	6.9%
医薬関連事業	150,581	157,000	4.3%
その他事業	1,531	3,000	95.6%
合計	1,059,411	1,150,000	8.6%

【増収要因】 研究用試薬関連事業：受託事業の回復、アルツハイマー病関連新製品が寄与
実験動物関連事業：アルツハイマー病モデルPS2マウス、飼育受託が進捗
医薬関連事業：便潜血検査用キットの供給



主要な経営課題

安定した収益源の確保
〔既存事業の建て直し〕



① 研究用試薬関連事業

- 自社独自の製品を開発 世界初の製品を目指す
- 営業の強化 各事業との相乗効果を高める
- 受託事業の回復
- 新規技術導入による製造コスト削減

② 実験動物関連事業

- 販売価格の見直し等による営業体制の強化
- 新製品にかかわる繁殖飼育などの疾患モデル動物受託などの新ビジネスモデルの構築
- 新技術の導入(SCOT)

③ 医薬関連事業

- 動物用体外診断用医薬品の牛海綿状脳症(BSE)の測定キットの製造委託
- 導出および導入活動の強化

④ 新規タンパク質生産技術の展開

- カイコ繭中に目的タンパク質を生産

決算概要・経営方針

2. 経営方針



中期経営計画の進行状況

経営の効率化およびコスト削減

〔高崎本社と藤岡研究所との統合〕

- 高崎本社を藤岡研究所に統合する⇒3月にほとんどの社員が移動
⇒本社社屋は売却予定
- 間接部門の合理化を図り、経営・販売・製造の一体化を推進し、製品品質の向上および製品供給スピードの向上を目指す⇒4月から新組織

〔新システムの構築〕

- 平成22年度より新システムを稼働させる⇒4月から稼働
- システム環境整備を推進し、経営の合理化・信頼性を確保する

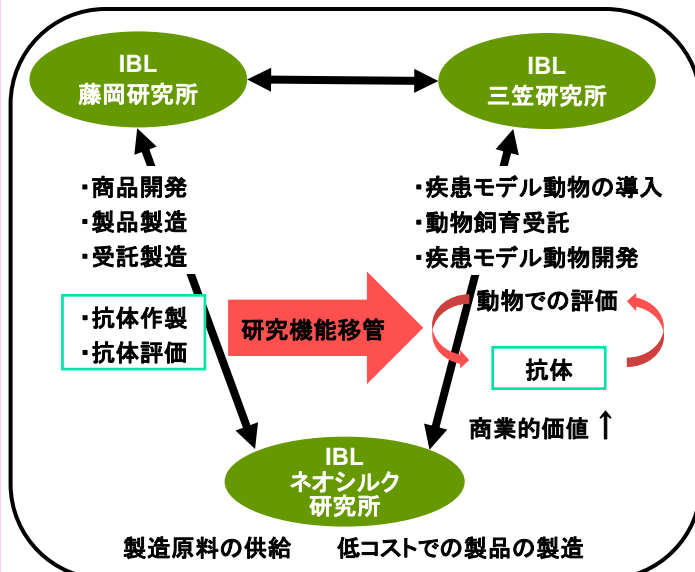
〔研究開発の選択と集中〕

- 抗体医薬シーズに対する研究開発を藤岡研究所から三笠研究所に集約し、**三笠研究所**は疾患モデル動物の開発も含め**研究開発の拠点**とする
- 抗体やELISAキットなどを中心とした研究用試薬関連の商品開発は藤岡研究所に集約する
⇒研究者の異動開始
⇒医薬シーズの研究開発を展開するための基盤づくり



研究開発の基盤づくり

藤岡研究所－三笠研究所－ネオシルク研究所構想



研究開発の基盤づくり

藤岡研究所－三笠研究所－ネオシルク研究所構想

- ・自社内での薬効試験が出来る体制づくり
→ 新規遺伝子組換えマウス作製手法の導入

**KOマウス、KIマウスなどの遺伝子組換えマウスは
創薬研究において非常に有用なツールである**



KO(ノックアウト)マウス
標的の遺伝子を発現させないように
遺伝子組換えを起こさせたマウス

標的分子を持っていないことで
病気を発症する疾病モデル



KI(ノックイン)マウス
標的の遺伝子をヒトの
遺伝子に置き換えたマウス

ヒト由来の標的分子に対する
薬剤の効果をマウスで評価できる
ヒト型化した疾患モデル

作製に1.5年から3年の期間と高額な費用が必要

創薬探索研究のツールとしては問題



研究開発の基盤づくり

藤岡研究所－三笠研究所－ネオシルク研究所構想

信州大学 新藤隆行教授との共同研究
SCOT (Speed Conditional Gene Targeting)
科学技術振興機構 研究成果最適展開支援事業
A-STEP採択

	従来法	SCOT法
迅速性	1.5～3年	半年で完成
確実性	多くは完成まで不明	各作製工程で成否のチェックが可能 (成功保証が可能)
応用性	対象とする遺伝子構造の特性 で遺伝子改変が制限される	・自由に遺伝子の改変が可能 ・多くの遺伝子改変トリック導入が可能

短期間で確実に生産できることで抗体作製、抗体評価用ツールとして利用可能
→ 自社内での抗体医薬の創薬研究に非常に有用(他との差別化が可能)

【新規タンパク質生産技術】

■ ネオシルク社吸収合併(5月31日)

【トランスジェニックカイコ特徴】

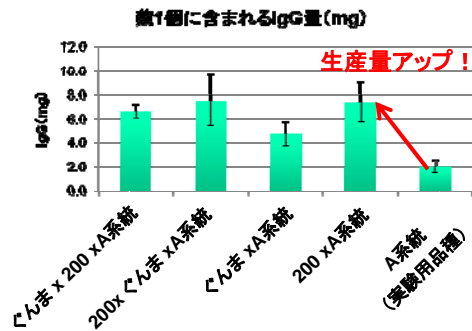
- 生物学的封じ込めが容易
- 設備費が少なく大量な飼育が可能
- 養蚕の技術・知識の蓄積が豊富
- 動物愛護の対象にならない
- 発現量が高い
- 精製が容易(セリシン・フィブロインの2種類のみ)
- ウイルスの混入、感染の可能性が低く安全
- 動物由来タンパクが含まれない
- 抗原性のある α 1-3フコースが無い
- α 1-6フコースが無いため高ADCC活性が期待できる
- 研究用試薬、診断薬、治療薬としての実績がない
- 系統の凍結保存が難しい



【新規タンパク質生産技術】

	動物由来培養細胞	マウス腹水	TGカイコの繭
	<p>培養フラスコ 培養タンク</p>		<p>抗体</p>
規模	大規模	小～中規模	小～大規模
必要な施設	多大な設備投資	マウスの飼育施設	カイコの飼育施設
えさ	培地(高額)	マウス、飼料費用	人工飼料、桑
安全性	動物由来物質混入	マウス体液から混入	含まれない
感染性ウイルス	確認の必要性		可能性が低い
精製	培地成分から精製	体液から精製	繭から精製(薬)
治療薬申請	実施例が豊富		実施例が無い
その他		動物愛護の問題 ロット間差が大きい	

【新規タンパク質生産技術】

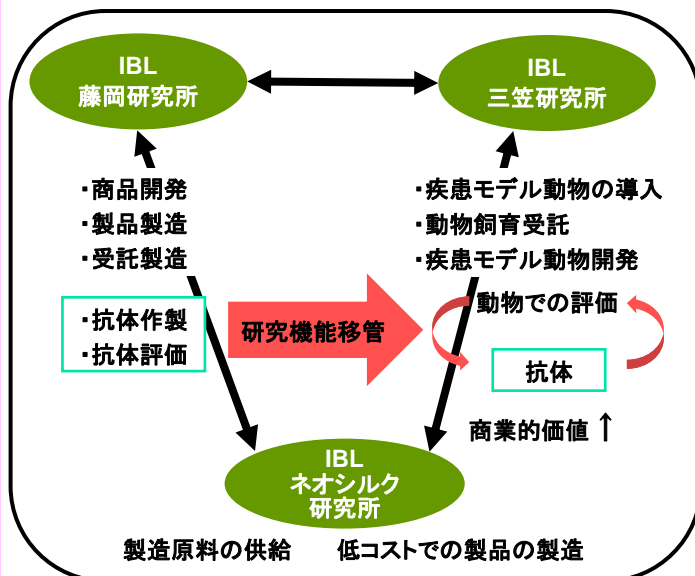


実験用品種を実用品種と交配させることで
タンパク質の生産量を向上させ、飼育も安定化させることが可能。

(群馬県蚕糸技術センターとの共同研究
→大量、安定飼育へ向けて)

研究開発の基盤づくり

藤岡研究所—三笠研究所—ネオシルク研究所構想





経営理念

「抗体」を通じて、
世界で難病に苦しむ人々が、
1日も早く、病気を克服し、
明るく豊かな暮らしを営めるよう
社会に貢献いたします。

注意事項

本発表において提供される資料ならびに情報は、当社経営陣が現時点において入手可能な情報によって判断したものであり、不確実である情報から得られた多くの仮定や考えによって作成されております。実際の成果は、さまざまな要素によって変化するため、業績見通し、開発見通しと大きく異なる結果となり得ることをご承知置ください。

実際の業績に影響を与える要素には、国内および国際的な経済情勢、業界ならびに市場の状況、金利および通貨為替の変動、新製品上市の遅延、導出先企業における開発の進捗の遅れ、技術的進歩、競合他社による特許の獲得、国内外の政府による法規制の変更などが含まれますが、これらに限定されるものではありません。